Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-06-07

なぜ習近平が選ばれたのか ： 中国における制度化された集団指導体制下の権力継承

李, 昊

(Citation)
近代,128:1-22

(Issue Date)
2024-03-31

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/0100488598

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100488598

KOBE UNIVERSITY

なぜ習近平が選ばれたのか
――中国における制度化された集団指導体制下の権力継承――

李　昊

はじめに

二〇二二年一〇月二二日、第二十回中国共産党全国代表大会において、六九歳の習近平は中央委員に選出された。翌日の第一回中央委員会全体会議において、総書記に選出され、異例の第三期政権を発足させた。二〇一二年一一月、習近平が総書記に就任したとき、最高指導者の任期は二期十年という不文律が定着しているように思われたし、権力基盤が脆弱な習近平総書記は、江沢民と胡錦濤の二人の元総書記の介入に悩まされるだろうと考えられていた。しかし、そのような事前の予想をことごとく覆し、習近平は急速に権力を集中させた。個人支配体制の確立に成功し、定年制の不文律を打破することができた。習近平は「羊の皮を被った狼」だった。

二〇〇七年の党大会時、習近平は五四歳の若さであり、二〇一二年より二期十年政権運営の中心を担えることに加え、同世代の李克強よりも上位の六位で最高指導部入りを果たした。そのこともあって、習近平が次期最高指導者に

事実上内定したと広く認識された。しかし、一方で習近平がこれほどまで強力な地位を確立できると思った者はほとんどいなかった。ならば、なぜ習近平が最高指導者に選ばれたのか。中国共産党のエリートたちは、習近平に何を期待したのだろうか。本稿では、習近平が最高指導者に選ばれた過程とその理由を分析したい。胡錦濤政権期において中国の指導者に求められる素質を明らかにし、その上で中国の集団指導体制が胡錦濤政権期にピークを迎えたことを論じる。中国における今日の急速な個人支配化は当時の想定とは大きく異なる展開であることを示す。

本稿では、以下のいくつかの側面から習近平の台頭を説明する。第一に、前提条件としての権力継承の制度化と幹部選抜政策について論じる。定期的な権力継承が目指され、半ば定着していた中、若手幹部が早期に選抜、育成される環境があった。習近平は早くから第五世代の中心となる幹部として訓練を受けてきたことを示す。第二に、「紅二代」としての習近平の出身背景の要因について論じる。現代中国において、建国の父たちの子弟である「紅二代」は、共産党政権に対する忠誠心と高級幹部との直接的なつながりゆえ、一貫して大きな存在感を有してきた。第三に、習近平の政治経歴について論じる。習近平は若くから三〇年にわたって地方勤務を続け、豊富な地方行政経験を有していた。このジェネラリストとしての経歴は、近年の中国の指導者の必要条件であり、習近平の評価を高めた要因である。第四に、派閥バランスの視点である。二〇〇〇年代は、江沢民の「上海閥」と胡錦濤の「共青団派」が熾烈な権力闘争を展開していた時期である。その中で、習近平は中立的な立場をとっていた。こうした派閥的中立性が重要な要因となった。特に決定的な要因として、胡錦濤政権が導入した民主推薦制度の効果に言及する。習近平は、二〇〇七年の党大会前に次期指導部を選出するにあたって実施された民主推薦という名の予備投票において支持を集めたといわれる。一連の議論を通じて、習近平の最高指導者への内定は、中国における制度化された権力継承メカニズムの典型例として行われたことを示す。しかし、それを習近平が自ら打破した。

一．権力継承の制度化

権威主義体制において、権力継承は常に大きな問題である。往々にして権力者の定期的な交代がなく、権力継承が制度化されていない。そのため、指導者の在任は長期にわたる場合が多く、権力者の死去や失脚に伴う権力継承が政治的危機につながりやすい。権力継承がいつ発生するのかが不確実である上、後継者をめぐる争いが発生して、政治が不安定になりやすい。ソ連をはじめとして共産党が支配する社会主義体制も例外ではなく、レーニン死後のトロツキーとスターリンの対立を典型例として、権力継承の問題に悩まされてきた[1]。中国では、毛沢東が劉少奇と林彪と自らが後継者に指名した人物と立て続けに対立し、権力継承は困難を極めた。最終的に、若い華国鋒が後継者に選ばれたが、華国鋒も短期間で鄧小平と陳雲の連合に敗れ、権力を失った。

鄧小平時代以降、文化大革命の反省に基づき、政治の制度化が進められた。一九八〇年、鄧小平は政治局拡大会議において、後に「党と国家の領導制度の改革」と題された講話を行った[2]。講話は過度な権力集中、官僚主義、家父長制などの弊害を含め、共産党政権のさまざまな課題に及んだが、一つの重要な論点は、幹部終身制であり、鄧小平は「如何なる指導的幹部の職務も無期限であってはならない」と断じた。緩やかながら、これ以降中国の指導者たちにも定年制が徐々に適用されていくことになった。鄧小平や陳雲など一九八〇年代の元老たちは、非公式に影響力を発揮し続けながらも徐々に第一線から退いていった。同時に青年幹部の抜擢と育成が行われ、着実に指導部の世代交代が進められていった。習近平が台頭した背景として、この権力継承の制度化と若手幹部の体系的な抜擢がまず前提条件であったことは言うまでもない。

権力継承の制度化をめぐってはすでに大量の研究が蓄積されており、詳細には立ち入らない[3]。ここで重要なのは、中国共産党の指導者が厳密に年齢に応じて引退するという慣習が定着したように見えたことである。一九九七年の第十五回党大会において、江沢民は七〇歳を超える者は新たに役職につかないとする七〇歳定年ルールを導入し、自身のライバルであった喬石を引退に追い込んだ[4]。二〇〇二年の第十六回党大会において、江沢民や李鵬、朱鎔基らが退任せず、権力の座に居座る可能性があるとの観測もあったが[5]、いずれも退任し、社会主義国では稀だった平和的な権力継承が実現した。同時に、江沢民は定年を六八歳に引き下げ、もう一人のライバルである李瑞環を退任させた[6]。多分に政治的意図のあるルール変更ではあったが、いわゆる「七上八下」と呼ばれる不文律となった。江沢民自身は、その後二〇〇四年まで党中央軍事委員会主席に留任したが[7]、それ以後、二〇一八年三月に中央委員を退任した王岐山が六九歳で国家副主席に選出されるまで例外なく「七上八下」が維持された。胡錦濤も二〇一二年に二期十年の任期を終えて総書記を退任した[8]。一九九七年の鄧小平の死去、二〇〇二年の江沢民から胡錦濤への権力継承を経て、中国のエリート政治はこの「七上八下」の不文律の下、一定程度制度化されたと広く評価された。

この定年ルールの形成によって、指導者集団の世代という概念がもたらされた。指導者集団の世代は、一九八九年の六四天安門事件に際して、鄧小平自身も用いた表現である[9]。毛沢東、劉少奇、周恩来、朱徳らを第一世代として、華国鋒を過渡的と評価した。鄧小平、陳雲ら自分たちが第二世代であり、これからは第三世代の指導者集団を打ち立てなければならないとした。これらは必ずしも年齢に基づいた分類ではなかったが、定年ルールが導入されてからは、権力継承が定期化することを考慮して、年齢で指導者の世代を分類することが一般的になった。一九九二年、胡錦濤が弱冠四九歳で最高指導部たる政治局常務委員に抜擢されると、胡錦濤が江沢民の後継者であると広く認識され、第四世代と呼ばれた[10]。定期的な権力継承と二〇〇二年に導入された六八歳定年制によって、年齢条件が厳密に適用

されるようになり、政治エリートの昇進と引退の予測可能性が高まった。二〇一二年の党大会時に六八歳以上になる一九四〇年代前半生まれの第四世代が退任し、一九五〇年代前半生まれの第五世代が引き続き二期十年党運営を担い、二〇二二年の党大会以降は一九六〇年代前半生まれの第六世代が中心になるというスケジュール観が広く共有された。習近平はまさしくこの定期的な権力継承ルールの下で、李克強と並ぶ第五世代の中心人物として台頭した[11]。

将来の権力交代が予定され、政治エリートが世代によってグループ分けされる状況においては、次の世代の指導者になるうる若手人材の選抜、育成が重要となる。鄧小平時代の重要な改革の一つが幹部任用であった。陳雲や鄧小平は一九八一年から中青年幹部の抜擢を急務であると強調し、「革命化、若年化、知識化、専門化」、すなわち「四化」の幹部を育成することを求めた[12]。胡錦濤や温家宝が甘粛省勤務時代に、宋平に見出されたのは広く知られているが、これはまさしく「四化」の典型的な事例である。次の世代の指導者候補として抜擢、訓練を受ける若手幹部は「第三梯隊」と呼ばれた。リスト化され、一九八四年に初めて名簿が作られた後、一九八七年まで毎年更新されたという[13]。江沢民や胡錦濤はもちろんのこと、当時河北省正定県に勤めていた習近平も名簿に含まれていた[14]。第十七期、第十八期の政治局常務委員のうち、「第三梯隊」の名簿に含まれていなかったのは二名のみだったという[15]。

習近平台頭の背景には、こうした体系的な若手幹部への世代交代と育成というトレンドがある。有望株は早くから昇進させ、責任ある役職で統治経験を積ませ、世代の中心として育成していくことが半ば常識となった。しかも、この若手幹部の育成は、単に一、二名を大抜擢するのではなく、世代ごとに集団として行われるものであった。明確に集団指導体制の定着（あるいは制度化）を目指した慣習だったと言えよう。

しかし、習近平政権期以降、若手幹部の抜擢と育成は明らかに停滞している。ここ数十年、指導部の平均年齢自体は大きく変わっていないものの、指導部の中心を担うことを期待される「若手の星」がいなくなるという状況が生じ

ている[16]。二〇一七年以降、後継者と目される若手幹部は最高指導部に含まれなくなった。二〇〇七年の第十七回党大会において、第五世代が政治局常務委員会入りしたとき、習近平と李克強はそれぞれ五四歳と五二歳の若さだった。それと比較して、第十九期と第二十期の政治局常務委員会において、最年少の趙楽際と丁薛祥はそれぞれ指導部発足当時、いずれも六〇歳であり、次世代の最高指導者とは見做されない。習近平は三期目に入り、四期目を視野に入れている。二期十年の定期的交代の目安として言及されてきた世代ももはや意味を失いつつある。

中央委員会に目を転じてみると、習近平や李克強ら第五世代は第十五回党大会（一九九七年）、あるいは第十六回党大会（二〇〇二年）時に中央委員入りした者が少なくない。かつて第六世代と呼ばれた一九六〇年代生まれの幹部では第十七回党大会（二〇〇七年）時に胡春華、孫政才、周強、張慶偉ら四名が中央委員入りした[17]。しかし、二〇二二年の第二十回党大会において、一九七〇年以降生まれの若手幹部は一人も中央委員に選ばれなかった。それどころか、部長級と呼ばれる役職レベルは二〇二四年二月現在で、李雲沢（国家金融監督管理総局長兼党委員会書記）、阿東（共産主義青年団中央書記処第一書記）の二人のみであり、いずれも将来の最高指導者候補とは見做されていない。二〇二四年現在、習近平の台頭をもたらし、集団指導体制の根幹をなした若手幹部の抜擢と育成を重視するトレンドは消滅しつつある。それは習近平の個人支配体制の原因でもあるし、結果でもある。

二、「紅二代」の威光

習近平台頭の第二の要因は、その家庭背景である。習近平が元副総理の習仲勲の息子であることは広く知られている。二〇一二年の総書記就任以前、報道においても、学術研究においても、習近平に言及する際、このことはなかば

枕詞のように付け加えられてきた。この家庭背景は間違いなく、習近平の台頭に大きく寄与したと言えよう。

共産党政権の樹立に貢献した革命家たちの子弟のことを指して、一般的に「太子党」と呼ばれることが多いが、この言葉には明らかにネガティヴなニュアンスが含まれている。高貴な身分を示す「太子」と群がりを表す「党」のいずれも、社会主義を標榜し党内の分派活動を厳しく禁じる中国共産党の理念に反する。そのため、当事者たちは「太子党」ではなく、「紅二代」という呼称を好む。「紅」は革命の色であり、革命の継承者というポジティヴなニュアンスになる。「太子党」も「紅二代」も指し示す対象は同じである。先行研究の大部分は、「太子党」という言葉を用いるが、以下では本論文の文脈に従って、「紅二代」の語句を用いる。

「紅二代」であることが実際の政治キャリアにおいて、有利にはたらくのか、それとも不利にはたらくのかは必ずしも断定的には論じられない。先行研究でも論争が展開されており、相矛盾する結論を示している[18]。すでに多くの先行研究が認めている通り、情報の不足もあって「紅二代」を正確に分類することが困難である。相矛盾する結果は、そうしたデータの混乱による部分も大きい。しかし、そうした矛盾をもたらす原因の一つとして、党の「紅二代」に対する態度にも一定程度の変化があったことが挙げられる。毛沢東時代、幹部たちはその子弟たちを含めて特権階級として優遇され、多くの政治的資源を優先的に享受できたという[19]。しかし、毛沢東とは異なり、鄧小平はむしろ「紅二代」を政治の中心から遠ざけることに努めた[20]。一九八〇年代の若手幹部の抜擢と育成のトレンドを経て、情実人事との批判を避けるために、「紅二代」が権力の中枢から排除された側面がある。一九九〇年代には政治における「紅二代」の存在感が明らかに低下し、「紅二代」は多くがビジネスに身を投じていった。

とはいえ、統計は個別的事例を説明しない。全体の傾向がどうであろうと、習近平のキャリアパスにおいて、「紅二代」であることが大きくプラスに作用したことは疑いようがない。習近平は一九七九年に清華大学を卒業して、二六歳で

国務院弁公庁、中央軍事委員会弁公庁秘書に着任し、耿飈（国務院副総理・中央軍事委員会秘書長）の秘書を務めた。言うまでもなく、一般市民が最初の就職で大物軍人の秘書となることは全く不可能である。耿飈は習近平の父である習仲勲の古い戦友であり、その関係が作用したと考えられる。ただし、習近平の就職にあたっては、母親である斉心の紹介があったと言われる[21]。一九八二年に、習近平は軍を離れて、基層幹部へと転身する。まだ二〇代の習近平は河北省正定県の党委員会副書記に就任し、翌年には書記に昇進する。このような早い昇進は通常では考えられない。「紅二代」の背景はキャリアのスタートラインにおいて明らかに有利にはたらいた。

一九九〇年代を通して、確かに「紅二代」はグループとして振るわなかった。一九九二年の党大会でも一九九七年の党大会でも、「紅二代」として名が知られていた人物はほとんど中央委員に選出されず、習近平も一九九七年の第十五回党大会では中央候補委員の最下位（一五一位）に滑り込むのがやっとだった[22]。しかし、少なくない「紅二代」がさまざまな分野とレベルで活躍しており、潜在的な有力勢力として注目されていたことも事実である[23]。

二〇〇〇年代に入ると、「紅二代」は再び台頭し始める。特に、習近平は基層での勤務経験を経て、若手幹部として台頭しつつあった。それどころか、胡錦濤の後継者候補として、李克強と並んで注目されるようになるほどだった[24]。他にも曽慶紅（曽山元内務部長の息子）が政治局常務委員として活躍し、大連市党委員会書記を経て遼寧省長となる薄熙来（薄一波元副総理の息子）も「紅二代」の有望株として頻繁に言及されるようになっていった。「紅二代」は「太子党」という派閥と見做され、その存在感が再発見され、広く注目の的となった[25]。二〇〇七年の第十七回党大会前後には、江沢民の「上海閥」、胡錦濤の「共青団派」、そして習近平の「太子党」の三つ巴の派閥闘争という必ずしも正確ではないイメージがメディアを中心に流布した。「紅二代」は必ずしも派閥としての実態はないものの、習近平と劉源（劉少奇元国家主席の息子）の関係のように、幼少期より交流があり、人脈が形成されている

場合も少なくない。二〇〇七年、習近平が李克強より上位で政治局常務委員会に入ったのは、曽慶紅の推薦があったと広く信じられているが[26]、そこには同じ「紅二代」としての安心感や信頼があったものと推測できる。

「紅二代」の血統的な正統性も重要な一因である。胡錦濤政権の下、中国は急速な経済発展を遂げるが、腐敗も急速に深刻化していた。そのような複雑な社会情勢の中、「紅二代」は革命の血統を継承する勢力として、共産党政権に忠誠を誓い、一定の正統性を持つと考えられるようになった。報道によると、二〇〇七年夏の北戴河会議において、秋に発足する新指導部の人事を議論する際、江沢民は習近平が「紅二代」であることを「党への忠誠心が高い」と評価したという[27]。このような見方は、党内及び中国社会に広く共有されていたと考えられる。

三、ジェネラリストとしての習近平

キャリアの観点から見ると、習近平はまさしく最高指導者にふさわしい経歴を積んできた。毛沢東、鄧小平ら革命世代が徐々に世を去るなか、中国の指導者は党と国家の巨大な官僚組織の中で経験を積んだテクノクラートが担うようになった。江沢民は第一機械工業部からキャリアをスタートさせ、上海市党委員会書記を務めて飛躍のチャンスを掴んだ。胡錦濤は共産主義青年団を権力基盤としていたが、貴州省、チベット自治区の党委員会書記を務めた経験を持つ。中国は面積が大きく、人口も多く、経済規模も大きい。各省、直轄市、自治区は国に相当するような規模を持つことも多い。近年では、省レベルの地域のトップを務め、党務、経済運営など多方面にわたる行政経験を積んだジェネラリストであることが最高指導者への条件であると言われることが多い。習近平や李克強はもちろん、政治局常務委員たちも、王滬寧などの少数の例外を除いて、大半の委員たちは地方行政経験を持つ。

習近平の場合、一九八二年に河北省正定県党委員会副書記になって以来、二〇〇七年秋に最高指導部入りするまで、一貫して地方幹部を務めてきた。しかも、基層レベルから一歩ずつ昇って来た。比較的に貧しい地域から、浙江省、上海市のような沿岸の最も経済が発展している地域まで、さまざまな地域を統治してきた経験を有する。習近平のライバルだった李克強は大学卒業後、長らく共産主義青年団に勤めていた。習近平よりも早く中央委員になったが、地方の行政経験は一九九八年にから二〇〇七年までの期間のみで、河南省長代理、河南省党委員会書記、遼寧省党委員会書記を務めた。地方に着任したときにはすでに高級幹部だった。各レベルの事情に詳しいという意味で、経歴の面では習近平の方が有利であったとも言える。

習近平の経歴から、習近平は政策面でも懸念の少ない指導者候補だった。二〇〇七年以降、その捉えどころのなさからか、習近平は業績を上げているとは言えないと評価されたが、二〇〇〇年代初頭に内部から流出したと思われる資料に基づくと、習近平は「生性豪爽、精明強幹」（豪快な性分で、聡明でよく仕事ができる）と評価され、ライバルであった李克強はむしろ「政績平淡、権威不足」（政治的業績は平凡で、権威が足りない）と評価されている[28]。もちろん、この表現は限られた一例でしかなく、李克強も高い評価を受けていたことは言うまでもないが、習近平も一貫して高く評価されていたことは留意すべきである。

一九九〇年代から二〇〇〇年代にかけて、中国は市場経済の導入、対外開放に邁進していた。指導者は改革・開放を推進できる開明的な人物であることが求められた。習近平は民生を重視し、一定の成果を上げていた。非公有経済の発展にも力を入れ、浙江省時代には『浙江日報』に「之江新語」という連載コラムで自らの政策を論じた。そのコラムは後に書籍にまとめられ、出版されている[29]。内容を見ると、民間経済が活発な浙江省の指導者らしく、産業構造の高度化に強い関心を寄せていたことがわかる。その前の福建省では、船上生活を送っていた住民の定住を推進

したことも知られている[30]。このような民生、民間経済志向の政策選好は二〇二三年現在の習近平とは大きく異なるイメージだが、最高指導部に入る前の習近平は、当時の政策のトレンドに寄り添った政策を打ち出していた。

もちろん、習近平と同じように基層から一歩ずつ昇進し、非公有経済の重要性を理解していた地方幹部は無数にいた。薄熙来もそうした一人である。習近平が何か突出した業績を上げたというよりも、キャリアの面でも、政策の面でも、それまでの改革・開放の成果を守り、さらに発展させることのできるという意味で、典型的な中国の地方指導者であったと考えられていた。その意味で、習近平は次期指導者候補としては、無難な人選であったと言えよう。

四．派閥バランス

習近平の台頭のもう一つの重要な要因は、政治エリート間の権力闘争の情勢、すなわち派閥のパワーバランスであった。ただし、習近平は派閥を背景として台頭したわけではない。派閥的中立性が習近平の強みとなったが、これは江沢民、胡錦濤と同様であった。

一九八九年、六四天安門事件に際して、時の総書記趙紫陽が失脚した。鄧小平と陳雲をはじめとする元老たちが趙紫陽の後任を選ぶ中で、有力候補となったのは江沢民（上海市党委員会書記）と李瑞環（天津市党委員会書記）という二人の地方幹部だった[31]。政治局常務委員会の中で、リベラル傾向の胡啓立は趙紫陽に近く、共産党政権を守るという観点からは不適格だった。一方、六四天安門事件における学生運動に対して強硬な立場を示した李鵬、姚依林などの保守勢力は国内外のイメージが悪く、改革・開放を推進する上で不利であると考えられ、不適格とされた。中央にしがらみがない若い人物という条件から、江沢民と李瑞環が候補として絞られたのだ。最終的に江沢民が総書記

に選ばれたのは、文化水準が高かったことが決め手だったと言われる。

江沢民と同様に、胡錦濤もほとんど派閥を頼りにすることなく、最高指導者に上りつめた[32]。甘粛省の水利部門のエンジニアとして働いていたが、幹部若返り政策の中で、当時の宋平甘粛省第一書記に見出され、抜擢された。その後北京で鄧小平や胡耀邦と交流を得て、共産主義青年団で昇進していくが、必ずしも鄧小平と胡耀邦とは派閥と言えるほど強固な関係はなかった。胡錦濤が最高指導者に選ばれたのは、官僚組織の中での仕事ぶりと、一九八九年のチベット動乱における強硬な対応が鄧小平に評価されたからであった。

江沢民政権期以降、集団指導体制が定着し、政治の制度化が進められるにつれて、人事交代が定期的に行われるようになった。そのため、政治エリートたちは高位の幹部との紐帯を頼って昇進を目指すようになった。江沢民の「上海閥」の拡大はその典型的な表れである。二〇〇二年、江沢民は総書記を胡錦濤に譲るが、数年間中央軍事委員会主席の役職を保持した。呉邦国、賈慶林、曽慶紅、黄菊など、多くの側近を政治局常務委員会に送り込んで影響力を保持し、胡錦濤はなかなか独自色を出せなかった。二〇〇〇年代にかけて、現職総書記の胡錦濤を中心とする「共青団派」と前任総書記の江沢民を中心とする「上海閥」の対立構造が中国のエリート政治の基調となった。

第一期胡錦濤政権のハイライトは、陳良宇上海市党委員会書記の失脚だった。陳良宇は江沢民の権力基盤である上海を統べる「上海閥」の主要人物だった。胡錦濤は、党大会を翌年秋に控える中、二〇〇六年秋に陳良宇を汚職腐敗の咎で摘発した。これはかつて陳希同北京市党委員会書記を排除した江沢民の手法と同じだった。陳良宇の失脚は胡錦濤の上海閥に対する挑戦だと受け取られた。陳良宇の後任人事の決定過程は明らかになっていないものの、アルフレッド・チャンによると、習近平、李源潮、張高麗の三人が候補となったという[33]。李源潮は共産主義青年団出身であり、胡錦濤に近い人物として知られていた。張高麗は必ずしも派閥の色彩は強くない。結局上海市党委員会書記

の後任に入ったのは、勢力拡大傾向にある「共青団派」とは距離のある習近平だった。江沢民以来、失脚した陳良宇を除いて、朱鎔基、呉邦国、黄菊と上海市党委員会書記はいずれも最高指導部入りを果たしていた[34]。遅かれ早かれ、習近平は更なる昇進を約束されたと考えられたが、果たして二〇〇七年の秋には最高指導部の一員となった。

習近平が最高指導者に選ばれる過程の中で、最大の山場は二〇〇七年の党大会であった。党大会閉幕翌日、第十七期一中全会で新指導部が選出され、習近平は李克強よりも上位で政治局常務委員となった。このことは決定的に重要だった。習近平は中央書記処書記を務め、党務を司り、李克強は国務院筆頭副総理となり、温家宝総理を輔けて政務を司ることとなった。もちろん、五年の間に不確定要因もあるものの、五年後には習近平総書記と李克強総理が誕生するものと広く考えられた。

習近平が最高指導者に選ばれるには、端的に言って最大のライバルである李克強との競争に勝利しなければならなかった。李克強は時の総書記である胡錦濤と同じ共産主義青年団出身であり、お互いに「錦濤」、「克強」と名前で呼び合うほど信頼しあっていたとも言われる[35]。そのこともあって、李克強は習近平と並んで第五世代の有望株として注目され、二〇〇七年の党大会の時期には、胡錦濤の後継最有力候補と日本メディアに報じられていた[36]。むしろ習近平が「李（克強）氏に次ぐ注目株」だった[37]。しかし、二〇〇七年の党大会は運命の分かれ道となった。李克強は習近平に後塵を拝し、最高指導者への道を閉ざされた。

この人事決定の最大の要因となったのは、「民主推薦」と呼ばれる事実上の人気投票制度だった。胡錦濤政権は党内民主の拡大に努め、その一つの試みが民主推薦だった。民主推薦の詳細な制度設計や結果は公表されていないが、若干の説明は新華社から公表されている[38]。若手幹部のリストが配布され、信任投票をするという形であると言われる。海外の報道や分析を総合すると、ここで習近平が李克強よりも多く票を集め、二〇〇七年の指導部人事はこの

民主推薦の投票結果が反映されたと言われる[39]。この見方は今日の中国政治研究においても受け入れられているようだ[40]。端的に言って、二〇〇七年時点において、李克強よりも習近平の方が人気の面で党内でより広く受け入れられていたのである。その要因としては以下が挙げられる。

第一に、李克強は胡錦濤の側近としてのイメージが強く、胡錦濤と距離を置く勢力からは明らかに歓迎されない人選であった。胡錦濤や李克強の出身母体である共産主義青年団は、二〇〇〇年代より一挙に台頭し、大勢力になっていたものの、江沢民率いる上海閥も依然として勢力を維持していた。上海の陳良宇の失脚を経てなお、江沢民は李源潮ではなく習近平をその後任に据えるだけの影響力を維持していたのだ。江沢民は党内の胡錦濤及び共産主義青年団と距離を置く勢力を糾合し、習近平という胡錦濤とも距離のある人物を後継者とすることに成功した。しかし、習近平は二〇〇七年に上海市党委員会書記となるまで上海とは縁がなかった。上で言及したように、曽慶紅は習近平のことを高く評価していたようだが、習近平自身は江沢民とほとんどつながりがない人物であった。陳良宇失脚を経て、江沢民の直系に属する若手幹部には、最高指導者になるほどの人材がおらず、外様の習近平を担ぎ上げるしかなかったとも言える。習近平は江沢民と胡錦濤といずれとも深い関係になく、その派閥的中立性ゆえに無難な人選だと考えられた。言い換えれば、悪目立ちしなかったと言える[41]。習近平が上海で陳良宇が残した部下を冷遇しなかったことも、江沢民の心証をよくしたとも言われる[42]。一方、習近平の最大のライバルであった李克強はあまりにも胡錦濤色が強かった。

第二に、人となりも重要な一因だった。二〇二三年現在、強権的な習近平と開明的な李克強というイメージが中国国外では広く共有されている。特に、二〇二三年一〇月に李克強が急死した際、その旧居に追悼者が殺到したことも報じられており、親民的なイメージが持たれている。そのイメージは間違ったものではないだろうが、中国は民主主

義国家ではない。中国の指導者を選ぶのは国民ではなく、共産党のエリートたちである。重要なのは、国民ではなく、政治エリートの評価である。特に胡錦濤政権期には退任した元国家指導者なども一定の影響力を持っていたと言われる。そうしたエスタブリッシュメント層の中では、習近平の方がより好まれる人物だったということである。李克強をはじめとする共産主義青年団出身者は、優秀で清廉ではあるが、官僚主義で柔軟性に欠ける傾向があると言われる。「胡錦濤が長老たちとの関係を大切にしない李克強にいらだち、あいさつをしておくように叱りつけた」とも報じられるように、李克強は「世渡り下手」だったと言われる[43]。一方の習近平は、「部下や企業家とのつきあいは薄いのに、老幹部のところには好んで足を運んでいたようだ」と言われるように[44]、党内の人脈を大事にしていたという。老幹部たちにとって、習近平は堅実で仕事ができるが、温和で人懐っこく、「誰とでも妥協できる」[45]人物と思われたのであり、二〇一二年以降の強面は想像もつかないものだっただろう。

他にも、上で論じたような「紅二代」としての家庭背景、長期にわたる地方勤務経験などが習近平の党内での評価を高めたと考えられる。いずれにしても、習近平はその派閥的中立性と人となりが高く評価された。結果、二〇〇〇年代の江沢民対胡錦濤という派閥対立構造の中で、二〇〇七年の重大局面において、李克強との競争に勝利した。

おわりに

二〇〇七年の党大会において、習近平は序列六位で政治局常務委員に選出された。ライバルの李克強よりも格上の地位を獲得し、次期最高指導者への道筋を固めた。もちろん、二〇一二年の実際の権力継承までまだ五年あり、その間も競争が続けられたが、習近平が中央書記処書記、李克強が国務院副総理という役割分担を見れば、事実上の後継

者指名は二〇〇七年の党大会時点だと断定して問題ない。本稿では習近平の台頭、そして二〇〇七年の人事の背景を分析、整理した。いくつかの要因を挙げたが、重要であるのは、習近平の次期指導者への事実上の内定が、制度化された集団指導体制下の権力継承の一環として行われたことである。習近平はその方向性を受け継ぎ、さらに発展させる指導者として期待された。

習近平政権発足以前、習近平は中国の「最弱の帝王」だと言われるほど[46]、脆弱な指導者になると予想された。しかし、それはある意味習近平という人選の意図するところでもあった。権力の独占を防ぎ、集団指導体制を維持し、二期十年の周期での指導者の交代を定着させる。こうした政治の制度化、党内民主の発展は胡錦濤政権を貫く大きな方向性であり、不可逆的とすら思われた。二〇一二年に習近平が総書記に就任したとき、政治局委員には第六世代に数えられる胡春華と孫政才が並び、二〇一七年の事実上の後継者指名に伴う最高指導部入り、二〇二二年の世代交代を控えていた。没個性の指導者と思われた習近平はそうした大きなトレンドの中に位置づけられたのだ。以下に本稿の議論を簡単に整理したい。

まず、習近平の台頭の前提条件となったのは、文化大革命の反省に基づく政治の制度化と幹部若返り政策だった。一九八〇年代、鄧小平と陳雲ら元老たちは幹部の終身制を廃止し、体系的な幹部若返りを進めた。重点的に育成すべき幹部のリスト化まで行われ、中国の政治エリートは年齢に応じて世代ごとに分類された。習近平や李克強らはこうした体系的な幹部若返り政策の中で、党と国家の指導者候補として重点的に育成された。

第二に、紅二代としての家庭背景も習近平にとって有利にはたらいた。清華大学卒業直後から耿飆の秘書を務め、一九八二年以降河北省正定県の副書記、書記を務めるなど、紅二代の特権的地位によって、キャリア面でもロケットスタートをきった。一九九〇年代の紅二代の全体的な低迷の割を食った面もあったが、二〇〇〇年代には紅二代であ

ることが江沢民に高く評価された。全体として、紅二代であることは習近平の大きな助けとなった。

第三に、ジェネラリストとしてのキャリアも習近平が評価される要因となった。江沢民政権期以降、最高指導部のメンバーの大半は豊富な地方経験を積んだジェネラリストによって占められるようになった。貴州省とチベット自治区で党委員会書記を務めた胡錦濤は典型である。その観点からも、県、市、省と各レベルでの勤務経験をもち、裕福な地域から貧しい地域までのさまざまな地域の事情に精通している習近平は優れたジェネラリストであり、最高指導者候補の経歴としては申し分なかった。

習近平と並んで、李克強も第五世代の最高指導者候補として注目されていた。紅二代ではないが、習近平と同世代で、共産主義青年団で活躍し、河南省、遼寧省と地方経験も積んだエリートである。習近平が二〇〇七年に事実上の次期最高指導者に内定したのは、この李克強との競争に勝ったことが決定的だった。その要因は、派閥バランスだった。李克強は胡錦濤の側近としてのイメージが強く、江沢民をはじめとする共産主義青年団と距離を有する勢力にとっては望ましくない人物だった。陳良宇の失脚に伴い、直系の人材を失った江沢民は、比較的に中立的な習近平を担ぎ上げ、胡錦濤に受け入れさせた。派閥的中立性は、江沢民、胡錦濤、習近平と三代続けて、最高指導者に選ばれるにあたっての重要な要因となった。また、エリート然として「世渡り下手」とされる李克強に対して、習近平は老幹部たちへのあいさつを欠かさず、党内で広く好印象を持たれた。こうした人となりも重要な一因となったと言える。

以上挙げた諸要因を見ても、習近平はそのキャリアや温和な性格ゆえ、調整役として立ち回り、改革・開放路線を継続することを期待されていた。習近平の最高指導者への選出は、制度化された集団指導体制下の権力継承の象徴的な人事であった。習近平が今日のように強権的な指導者になることを期待されていた気配はない。

調整型の「弱い」リーダーから権力が集中する「強い」リーダーへの転換は、第二期胡錦濤政権の教訓を経たもの

だった。集団指導体制が定着した結果、指導部内の分権性が強まり、「九龍治水」の様相を呈し、「船頭多くして船山に登る」状況が発生した[47]。胡錦濤総書記は政治運営の主導権を握ることができないまま、任期を終えることとなった。第二期胡錦濤指導部の一員でもあった習近平は内部からその様子をつぶさに観察していた。この反省として、習近平政権においては総書記がある程度リーダーシップを発揮すべきだとするコンセンサスが党内に形成されたと思われる。二〇一二年の党大会時に胡錦濤が中央軍事委員会主席に留任することなく完全引退したことも、習近平の権力集中に貢献した。しかし、このコンセンサスがいつまで有効だったのかはわからない。一旦権力を強化してしまえば、その権力をもう一度制限することは困難になる。改革を前に進めるための権力集中はいつしか個人支配体制に転換し、集団指導体制はみるみる後退していった。二〇二四年現在の展開は、二〇〇七年当時、共産党の指導者たちも全く想定していなかった事態であろう。

注

1　社会主義国における権力継承問題について、古典的な研究として Myron Rush, *How Communist States Change Their Rulers,* Ithaca and London: Cornell University Press, 1974 がある。

2　鄧小平「党和国家領導制度的改革」『鄧小平文選』第二版第二巻、北京、人民出版社、一九九四年、三一〇―三四三頁。

3　代表的な研究として以下のものがある。John Wong and Zheng Yongnian eds., *China's Post-Jiang Leadership Succession: Problems and Perspectives,* Singapore: National University of Singapore Press and World Scientific, Jing Huang "Institutionalization of Power Succession in China: Progress and Implications," in Cheng Li ed., *China's Changing Political Landscape: Prospects for Democracy,* Washington, D.C.: Brookings Institution Press, 2008, pp.80-97, Jinghan Zeng "Institutionalization of the Authoritarian Leadership in China: A Power Succession System with Chinese Characteristics?" *Contemporary Politics,* Vol.20, No.3, 2014, pp.294-314, Zhengxu Wang and Anastas Vangeli, "The Rules and Norms of

Leadership Succession in China: From Deng Xiaoping to Xi Jinping and Beyong." *The China Journal*, No.76, 2016, pp.24-40.

4 江沢民自身は七一歳だったが、誕生日が年の後半にある場合は一歳分をカウントしないという内規を作り、特別に留任した。季東明「安定第一、団結第二――第一五回党大会と政権左右両翼の地盤沈下（後編）」『中国経済』一九九七年一一月号、一六―一七頁。

5 Susan Shirk "Will the Institutionalization of Party Leadership Survive the 2002-03 Succession?" *The China Journal*, No.45, 2001, p.139.

6 Wang and Vangeli, "The Rules and Norms of Leadership Succession in China," pp.30-32.

7 国家中央軍事委員会主席からの退任は全国人民代表大会を待って、二〇〇五年三月になった。

8 国家主席の役職は、翌二〇一三年の全国人民大会で交代した。

9 鄧小平「組成一個実行改革的有希望的領導集体」『鄧小平文選』第三巻、北京、人民出版社、一九九三年、二九八―二九九頁。

10 Cheng Li, *China's Leaders: The New Generation*, Lanham: Rowman & Littlefield, 2001, pp.51-86; Zheng Yongnian amd Lye Liang Fook, "Elite Politics and the Fourth Generation of Chinese Leadership," *Journal of Chinese Political Science*, Vol.8, Nos.1 & 2, 2003, pp.65-86. 宗海仁『第四代』Carle Place, 明鏡出版社、二〇〇二年。

11 Yongnian Zheng and Gang Chen "Xi Jinping's Rise and Political Implications," *China: An International Journal*, Vol.7, No.1, 2009, pp.1-30, Andrew J. Nathan and Bruce Gilley, *China's New Rulers: The Secret Files*, New York: New York Review Books, 2002, pp.120-127.

12 鄧小平「老幹部第一位的任務是選抜中青年幹部」『鄧小平文選』第三巻、三八四―三八八頁、陳雲「提抜培養中青年幹部是当務之急」『陳雲文選』第三巻、北京、人民出版社、一九九五年、二九二―二九七頁、陳雲「成千上万地提抜中青年幹部」『陳雲文選』第三巻、二九八―三〇三頁。陳雲は、後に国務院総理になる李鵬を名指しして推薦している。

13 楊敏「〝第三梯隊〟名単建立前後：起用一代新人」『中国新聞週刊』二〇一四年九月八日号、三〇―三一頁。

14 楊敏「〝第三梯隊〟名単建立前後」三〇頁。ただし、本記事では直接の名指しは避けて、「当時の河北省正定県書記」と表記している。

15 楊敏「〝第三梯隊〟名単建立前後」三一頁。

16 「「出る杭」出なくなった中国の出世競争　若手の星、あえて育てない？」朝日新聞デジタル、二〇二二年一〇月一〇日（https://digital.asahi.com/articles/ASQB964ZMQ9JUHBI03F.html）。

17 二〇二二年現在、孫政才は失脚し、残る三人は実権にそしい職務についている。

18 Jinghan Zeng, “What Matters Most in Selecting Chinese Top Leaders? Qualitative Comparative Analysis,” *Journal of Chinese Political Science,* Vol.18, No.3, 2013, pp.223-239; Tony Huiquan Zhang “The Rise of the Princelings in China: Career Advantages and Collective Elite Reproduction,” *Journal of East Asian Studies,* Vol.19, No.2, 2019, pp.169-196.

19 Zhang “The Rise of the Princelings in China,” pp.17-19.

20 Victor C. Shih, *Coalitions of the Weak: Elite Politics in China from Mao’s Stratagem to the Rise of Xi,* New York: Cambridge University Press, Chapter 7.

21 Alfred L. Chan, *Xi Jinping: Political Career, Governance, and Leadership, 1953-2018,* New York: Oxford University Press, 2022, p.43, 宗海仁『第四代』三九四頁。

22 一五一人という中途半端な数字から推測して、習近平は中央候補委員選挙に落選していたのを救済されたという見方もある。高新「習近平是如何〝当選〟十五届中央候補委員的」自由亜洲電台、二〇二二年三月二一日（https://www.rfa.org/mandarin/zhuanlan/yehuazhongnanhai/gx-03312023090710.html）。

23 何頻、高新『中共「太子党」』第二次修訂版、Park Place, NY, 明鏡出版社、一九九六年。

24 宗海仁『第四代』三八九―四一〇頁、Andrew J. Nathan and Bruce Gilley, *China’s New Rulers* pp.120-128.

25 Bo Zhiyue, *China’s Elite Politics: Political Transition and Power Balancing,* Singapore: World Scientific, 2007, Chapter 4.

26 Willy Wo-Lap Lam, *Chinese Politics in the Era of Xi Jinping,* New York and London: Routledge, 2015, p.56, Cheng Li, *Chinese Politics in the Xi Jinping Era: Reassessing Collective Leadership,* Washington, D.C.: Brookings Institution Press, 2016, p.216, 高新「沒有江、曾的推挙就沒有習近平的上位」自由亜洲電台、二〇二三年一月二日（https://www.rfa.org/mandarin/zhuanlan/yehuazhongnanhai/gx-01022023155742.html）。

27 朝日新聞中国総局『紅の党　完全版』朝日新聞出版、二〇一三年、一七一頁。

28 宗海仁『第四代』三八九頁、四二一頁。
29 習近平『之江新語』杭州、浙江人民出版社、二〇〇七年。
30 宗海仁『第四代』四〇五―四〇六頁。
31 江沢民が総書記に選出された過程については、李昊『派閥の中国政治　毛沢東から習近平まで』名古屋大学出版会、二〇二三年、二五〇―二五一頁を参照。
32 李昊『派閥の中国政治』二六三―二六四頁。
33 Chan, *Xi Jinping*, pp. 145-146.
34 習近平の後の上海市党委員会書記経験者の兪正声、韓正、李強も同様に最高指導部入りを果たしており、最高指導部入りの登竜門であり続けている。
35 朝日新聞中国総局『紅の党　完全版』一八五頁。
36 「真の「胡体制」幕開け」『読売新聞』二〇〇七年一〇月一二日。
37 坂尻信義、峯村健司「ポスト胡 公開審査」『朝日新聞』二〇〇七年一〇月一七日。
38 「新一届中央委員会和中央紀律検査委員会誕生記」中国政府網、二〇〇七年一〇月二一日（https://www.gov.cn/ztzl/17da/content_781254.htm）。
39 Lam, *Chinese Politics in the Era of Xi Jinping*, p.58. 朝日新聞中国総局『紅の党　完全版』一九二―一九四頁。なお、薄熙来はこの投票で顕著に評判が悪かったという。
40 Bo Zhiyue, *China's Elite Politics: Governance and Democratization*, Singapore: World Scientific, 2010, p. 25, Susan L. Shirk "The Return to Personalistic Rule," *Journal of Democracy*, Vol. 29, No. 2, 2018, p. 28.
41 朝日新聞中国総局『紅の党　完全版』一九四頁。
42 朝日新聞中国総局『紅の党　完全版』一九三頁。
43 朝日新聞中国総局『紅の党　完全版』一九五頁、比嘉清太「党エリート　冷遇の最後　李克強氏死去　世渡り下手　習氏と逆転」『読売新聞』二〇二三年一〇月二八日。

44　朝日新聞中国総局『紅の党　完全版』一九五頁。

45　Grace Tsoi and Sylvia Chang “How Xi Jinping Made Himself Unchallengeable,” BBC, 17 October 2022（https://www.bbc.com/news/world-asia-china-63210545）.

46　矢板明夫『習近平　共産中国最弱の帝王』文藝春秋、二〇一二年。このような見方は研究者、ジャーナリスト、政策関係者に広く共有されていたことは強調しておきたい。

47　角崎信也「『China Report』Vol.9　習近平政治の検証④：　集権のジレンマ　―習近平の権力の現状と背景（下）―」日本国際問題研究所、二〇一八年二月一六日（https://www.jiia.or.jp/column/ChinaReport09.html）。

（り・こう　比較政治）